

Lucille Chia

Printing for Profit: The Commercial Publishers of Jianyang, Fujian (11th-17th Centuries) (Harvard-Yenching Institute Monograph Series, number 56.)

高 津 孝

一

著者ルシール・チア博士は、一九七六年、ニューヨーク大學において化學の博士號（p h D）取得後、一九九一年、コロンビア大學で中國史の修士號、一九九六年、同大學で中國史の博士號（p h D）を取得、現在、カリフォルニア大學リバーサイド校で、歴史學の準教授を務めておられる。書名の日本語譯は、『營利出版 福建・建陽の商業出版者（十一—十七世紀）』である。以下、目次を示すと、

第一部

1 序章

・ 目的と研究の領域 ・ 建陽と中國出版史 ・ 主要資料につ

いて ・ 閩北の地理

2 建陽木版印刷の物理的外觀

・ 圖書出版に使用された素材 ・ 木版彫刻 ・ 建陽木版本のデザイン

第二部

3 宋元代の建陽の出版業の發展

・ 歴史的背景 ・ 建陽の出版者 ・ 出版者としての劉、余、熊家

4 宋元代の建陽の出版

・ 宋元代建陽の出版物の視覺的外觀 ・ 麻沙本 ・ 建陽の出版・概觀 ・ 要約と定説と異なる結論

第三部

5 明代の建陽の出版業

・ 歴史的背景 ・ 商業出版者と政府出版者 ・ 明代における建陽出版業の圖表化

6 明代の建陽の出版

・ 明代建陽の出版物の視覺的外觀 ・ 明代建陽の出版についての抜粹した概要 ・ 清代の餘波 ・ 要約

7 結論

本書の特徴は、次の三點にまとめられる。（一）中國出版文化研究において、特に不十分であった商業出版について系統的に論じた點、（二）建陽というユニークな商業出版センターを取り上げ、可能な限り全ての出版物をリストアップし、統計的な検討を加えた點、（三）ヨーロッパ出版文化史の豊かな研究成果を参

Lucille Chia

Printing for Profit: The Commercial Publishers of Jianyang, Fujian (11th-17th Centuries) (Harvard-Yenching Institute Monograph Series, number 56.)

高 津 孝

一

著者ルシール・チア博士は、一九七六年、ニューヨーク大學において化學の博士號（p h D）取得後、一九九一年、コロンビア大學で中國史の修士號、一九九六年、同大學で中國史の博士號（p h D）を取得、現在、カリフォルニア大學リバーサイド校で、歴史學の準教授を務めておられる。書名の日本語譯は、『營利出版 福建・建陽の商業出版者（十一—十七世紀）』である。以下、目次を示すと、

第一部

1 序章

・ 目的と研究の領域 ・ 建陽と中國出版史 ・ 主要資料につ

いて ・ 閩北の地理

2 建陽木版印刷の物理的外觀

・ 圖書出版に使用された素材 ・ 木版彫刻 ・ 建陽木版本のデザイン

第二部

3 宋元代の建陽の出版業の發展

・ 歴史的背景 ・ 建陽の出版者 ・ 出版者としての劉、余、熊家

4 宋元代の建陽の出版

・ 宋元代建陽の出版物の視覺的外觀 ・ 麻沙本 ・ 建陽の出版・概觀 ・ 要約と定説と異なる結論

第三部

5 明代の建陽の出版業

・ 歴史的背景 ・ 商業出版者と政府出版者 ・ 明代における建陽出版業の圖表化

6 明代の建陽の出版

・ 明代建陽の出版物の視覺的外觀 ・ 明代建陽の出版についての抜粹した概要 ・ 清代の餘波 ・ 要約

7 結論

本書の特徴は、次の三點にまとめられる。（一）中國出版文化研究において、特に不十分であった商業出版について系統的に論じた點、（二）建陽というユニークな商業出版センターを取り上げ、可能な限り全ての出版物をリストアップし、統計的な検討を加えた點、（三）ヨーロッパ出版文化史の豊かな研究成果を参

照體系とし、中國の出版文化との差異、缺落について明確に問題化し検討を加えた點である。

二

本書は、まず、既存の中國出版史の研究が、書誌學的側面に重點を専ら置き、その分析の對象も政府系出版物、上質の個人出版物、大藏經等の宗教出版物に主として限られてきたこと、その結果、中國社會の廣く様々な嗜好と要求を適切には反映しておらず、特に利益追求型の商業出版についての検討が不十分であった點を指摘する。したがって、本書は、中國における商業出版を中心に論ずる譯であるが、特に福建北部の山間部に位置する建陽（麻沙、書坊の二地點）に焦點を當てて考察を行っている。建陽を選んだ理由は、（一）十一世紀中葉から十七世紀後半まで、六百年以上にわたって出版活動が行われた地域であること、（二）出版物の多様性、（三）福建地區は地方志、家譜等の地域資料が豊富に残されていること、の三點である。著者の推定によれば、宋代から明代までに中國全體で出版された出版物の七分の一が建陽の出版物であるという。

中國書誌學では、傳統的に出版形態を、官刻（政府出版）、私刻（個人出版）、坊刻（商業出版）の三種に分類する。著者の對象は商業出版の坊刻であるが、著者によれば、利益を求めて出版活動を行う點では三者は同一であり、特に個人出版と商業出版の區別は難しく、堂名等による機械的分類による區別は出来ない主張する。著者の提案する區分は、（一）政府、宗教組織による公的保護下での出版、（二）利益追求の商業出版、（三）個人出版

であり、個人出版は序文、刊記の内容によって判斷するというものである。たとえば、宋代建陽の出版物に現れる「家塾」という語は、商業出版か否か問題となるが、明白に商業出版者と判斷できる他の出版社と同様の出版物を出版していることから商業出版であったと判斷する。しかし、商業出版と個人出版を區別する絶對的基準は存在しないという。

著者の最も重要な貢獻は、宋代から清朝までの六百年間を越える期間に建陽で出版された全ての出版物を可能なかぎり調査し、年代區分、詳細な四部分類を行い、統計的處理を施した點が挙げられる。著者の準備した建陽の商業出版目録は、宋代一九二點（公的援助によるもの一四點）、元代二二〇點（公的援助によるもの二點）、明代一六六四點（公的援助によるもの五八點、清代約三〇點（公的援助によるもの約一〇點）、總計二一九〇點のテキストを含むものである。公的援助とは、建陽縣、建寧府、福建路または福建省等による援助を受けて出版されたものを指す。また、この出版目録は、個人出版と商業出版を區別することが事實上困難であるという理由から、宋元の「家塾」「書院」「精舍」の出版物を含んでいる。著者によれば、それらはそれぞれの時代の出版物の約一〇パーセントを占めるにすぎないという。また、明代における二、三點の出版物しかない出版者も個人出版か商業出版かという問題が生じるが、大部分が商業出版産業の產物であるという理由で目録に加えている。また、官刻についても、たとえば官吏の個人出版であったとしても、政府の資源を用いて、建陽の商業出版産業を利用して出版されたという點から目録に加えている。著者が建陽出版目録作成に利用した資料は、中國の一七の圖

照體系とし、中國の出版文化との差異、缺落について明確に問題化し検討を加えた點である。

二

本書は、まず、既存の中國出版史の研究が、書誌學的側面に重點を専ら置き、その分析の對象も政府系出版物、上質の個人出版物、大藏經等の宗教出版物に主として限られてきたこと、その結果、中國社會の廣く様々な嗜好と要求を適切には反映しておらず、特に利益追求型の商業出版についての検討が不十分であつた點を指摘する。したがって、本書は、中國における商業出版を中心に論ずる譯であるが、特に福建北部の山間部に位置する建陽（麻沙、書坊の二地點）に焦點を當てて考察を行っている。建陽を選んだ理由は、（一）十一世紀中葉から十七世紀後半まで、六百年以上にわたつて出版活動が行われた地域であること、（二）出版物の多様性、（三）福建地區は地方志、家譜等の地域資料が豊富に残されていること、の三點である。著者の推定によれば、宋代から明代までに中國全體で出版された出版物の七分の一が建陽の出版物であるという。

中國書誌學では、傳統的に出版形態を、官刻（政府出版）、私刻（個人出版）、坊刻（商業出版）の三種に分類する。著者の對象は商業出版の坊刻であるが、著者によれば、利益を求めて出版活動を行う點では三者は同一であり、特に個人出版と商業出版の區別は難しく、堂名等による機械的分類による區別は出来ない主張する。著者の提案する區分は、（一）政府、宗教組織による公的保護下での出版、（二）利益追求の商業出版、（三）個人出版

であり、個人出版は序文、刊記の内容によつて判斷するというものである。たとえば、宋代建陽の出版物に現れる「家塾」という語は、商業出版か否か問題となるが、明白に商業出版者と判斷できる他の出版社と同様の出版物を出版していることから商業出版であつたと判斷する。しかし、商業出版と個人出版を區別する絶對的基準は存在しないという。

著者の最も重要な貢獻は、宋代から清朝までの六百年間を越える期間に建陽で出版された全ての出版物を可能なかぎり調査し、年代區分、詳細な四部分類を行い、統計的處理を施した點が挙げられる。著者の準備した建陽の商業出版目録は、宋代一九二點（公的援助によるもの一四點）、元代二二〇點（公的援助によるもの二點）、明代一六六四點（公的援助によるもの五八點、清代約三〇點（公的援助によるもの約一〇點）、總計二一九〇點のテキストを含むものである。公的援助とは、建陽縣、建寧府、福建路または福建省等による援助を受けて出版されたものを指す。また、この出版目録は、個人出版と商業出版を區別することが事實上困難であるという理由から、宋元の「家塾」「書院」「精舍」の出版物を含んでいる。著者によれば、それらはそれぞれの時代の出版物の約一〇パーセントを占めるにすぎないという。また、明代における二、三點の出版物しかない出版者も個人出版か商業出版かという問題が生じるが、大部分が商業出版産業の產物であるという理由で目録に加えている。また、官刻についても、たとえば官吏の個人出版であつたとしても、政府の資源を用いて、建陽の商業出版産業を利用して出版されたという點から目録に加えている。著者が建陽出版目録作成に利用した資料は、中國の一七の圖

書館、日本の一の圖書館、臺灣の三つの圖書館、米國の五つの圖書館、イギリスの三つの圖書館の出版された圖書目錄およびカード、一〇〇を越える注釋附き書目、オンラインの中國善本カタログ（RELIN）、ヨーロッパの圖書館の少數の藏書である。

さらに、著者は一九九二年以降、三六ヶ月をかけて、中國、臺灣、日本、米國、イギリスで、四七點の宋版、八六點の元版、七三五點の明版を實際に調査し、二〇〇點以上の建陽刊本（數葉または全卷現存）を影印版で調査している。著者によれば、著者の建陽商業出版目錄は完璧ではないが、宋版の約九五パーセント、元明版の九〇パーセント以上をカバーするという。建陽刊本との認定は、（一）著者自身の調査により證據を見出した場合、（二）書目の信賴するに足る記載から證據が得られた場合に限られ、究極的には、可能な場合、中國書誌學者に相談した上で、著者自身の経験に基づく推測に従ったという。出版年代ないしは木版作成年代の確定作業は、刊記に附された年代、最新の序文、跋文の年代、物理的特徴（書體、裝丁、紙質、木版の特徴）に基づいたが、これらの手がかりが利用不可能な場合、やむを得ず、著者自身の経験に基づく推測に従ったという。よって、「南宋末もしくは元」「元末明初」という以外に正確な年代確定が不可能な場合も、王朝區分の人爲的性格を感じつつも、所與の時代區分に合わせて恣意的判斷をやむなく下したという。したがって、著者は、この數値が、所與の時代における所與のカテゴリーに對する出版物の數の絶對量ではなく、出版傾向の指標として有効であるという。しかしながら、本書には、宋元版の選ばれた建陽刊本八六點が、出版者、題名、年代、四部分類、大きさ（及び行數、字數）、書口、

刻工、所藏機關を明らかにしてリストアップされた表一つ以外は、統計的處理を施した結果のみ示され、二一九〇點の建陽刊本は如何なるものかについての全體像は示されていない。したがって、現状では著者の建陽刊本の認定の妥當性、年代判定の妥當性、四部分類の妥當性について、誰も何らの檢證も行えないのである。また、中國書誌學は、しばしば基本的事實の認定にあたって恣意性を指摘されることが多かった。本書においても、建陽刊本かどうか判斷の別れる場合、そうした問題となるケースを除外した場合の統計的處理の結果と、含めた場合の結果を比較する作業を示していれば、著者の處理の妥當性がより明確化し、無用な恣意性の譏りを免れたのではないかと考えられる。年代判定についても、同様であり、王朝區分とは別個の處理をしたものを準備することは、本書の主張の妨げとはならなかったであろう。著者の調査したテキストの膨大な量を考慮するなら、誰もが納得する基準にもとづく嚴選されたテキストのみを對象としても充分な結果が得られたであろうと思われる。しかしながら、曖昧な外延部を含みつつも、可能な限りの建陽の出版物全てを對象にした調査は、これまで漠然と推定されてきた事柄に確實性と説得力を與えてくれ、今後の研究の基盤を形成した功績は否定できないであろう。

本書の最も主要な業績である、可能な限り調査檢出された建陽の全出版物に基づく統計的處理の結果について、以下まとめる。

明代を弘治年間末年（一五〇五）で前半後半に分割すると、約一六六〇件の建陽の出版物中、約一七九件（二パーセント）が明代前半一三八年間の出版物である。さらに、南京、蘇州、無錫、杭州という江南の大都市出版セクターからの出版物について同様

書館、日本の一の圖書館、臺灣の三つの圖書館、米國の五つの圖書館、イギリスの三つの圖書館の出版された圖書目錄およびカード、一〇〇を越える注釋附き書目、オンラインの中國善本カタログ（RELIN）、ヨーロッパの圖書館の少數の藏書である。

さらに、著者は一九九二年以降、三六ヶ月をかけて、中國、臺灣、日本、米國、イギリスで、四七點の宋版、八六點の元版、七三五點の明版を實際に調査し、二〇〇點以上の建陽刊本（數葉または全卷現存）を影印版で調査している。著者によれば、著者の建陽商業出版目錄は完璧ではないが、宋版の約九五パーセント、元明版の九〇パーセント以上をカバーするという。建陽刊本との認定は、（一）著者自身の調査により證據を見出した場合、（二）書目の信賴するに足る記載から證據が得られた場合に限られ、究極的には、可能な場合、中國書誌學者に相談した上で、著者自身の経験に基づく推測に従ったという。出版年代ないしは木版作成年代の確定作業は、刊記に附された年代、最新の序文、跋文の年代、物理的特徴（書體、裝丁、紙質、木版の特徴）に基づいたが、これらの手がかりが利用不可能な場合、やむを得ず、著者自身の経験に基づく推測に従ったという。よって、「南宋末もしくは元」「元末明初」という以外に正確な年代確定が不可能な場合も、王朝區分の人爲的性格を感じつつも、所與の時代區分に合わせて恣意的判斷をやむなく下したという。したがって、著者は、この數値が、所與の時代における所與のカテゴリーに對する出版物の數の絶對量ではなく、出版傾向の指標として有効であるという。しかしながら、本書には、宋元版の選ばれた建陽刊本八六點が、出版者、題名、年代、四部分類、大きさ（及び行數、字數）、書口、

刻工、所藏機關を明らかにしてリストアップされた表一つ以外は、統計的處理を施した結果のみ示され、二一九〇點の建陽刊本は如何なるものかについての全體像は示されていない。したがって、現状では著者の建陽刊本の認定の妥當性、年代判定の妥當性、四部分類の妥當性について、誰も何らの檢證も行えないのである。また、中國書誌學は、しばしば基本的事實の認定にあたって恣意性を指摘されることが多かった。本書においても、建陽刊本かどうか判斷の別れる場合、そうした問題となるケースを除外した場合の統計的處理の結果と、含めた場合の結果を比較する作業を示していれば、著者の處理の妥當性がより明確化し、無用な恣意性の譏りを免れたのではないかと考えられる。年代判定についても、同様であり、王朝區分とは別個の處理をしたものを準備することは、本書の主張の妨げとはならなかったであろう。著者の調査したテキストの膨大な量を考慮するなら、誰もが納得する基準にもとづく嚴選されたテキストのみを對象としても充分な結果が得られたであろうと思われる。しかしながら、曖昧な外延部を含みつつも、可能な限りの建陽の出版物全てを對象にした調査は、これまで漠然と推定されてきた事柄に確實性と説得力を與えてくれ、今後の研究の基盤を形成した功績は否定できないであろう。

本書の最も主要な業績である、可能な限り調査檢出された建陽の全出版物に基づく統計的處理の結果について、以下まとめる。

明代を弘治年間末年（一五〇五）で前半後半に分割すると、約一六六〇件の建陽の出版物中、約一七九件（二パーセント）が明代前半一三八年間の出版物である。さらに、南京、蘇州、無錫、杭州という江南の大都市出版セクターからの出版物について同様

の處理を行うと、明代前半の出版物は、全體のわずか一〇パーセント以下となる。この數字は、初期の印刷物の「自然な」残存率低下に歸することはできない。歴史的狀況は、建陽と江南の兩方に同じように出版業の衰退をもたらしたのである。

出版物の残存率の正確化は、明代前期と後期の出版量の不均衡を是正するのだろうか。一五五三年版『建陽縣志』中の三八四タイトルと一五七〇年ごろ編纂の周弘祖『古今書刻』中の建陽刊本三六八タイトルを、現存のリストと比較すると、どちらのケースにおいても約三分の一の残存率が得られる。しかしながら、この二つのリストはともに十分なものではない。前者には宋元版を含む可能性があるが、一四部の宋元版を除いても、残存率は三六パーセント程度にしか増えない。後者には一五七三年以前に出版された醫書、文集の現存リストの半分以下しか含まず、完全なリストとは言えない。また、兩者はともに、小説や演劇を含まない。この残存率の是正を受け入れ、既知の數字を三倍し、かつ明代後期の残存率を百パーセントと假定しても、明代前半に出版された圖書は三六パーセントにしか増加しない。明代後期、建陽での商業出版の著しい進展は否定できない事實である。

十六世紀初頭、商業出版の復興があり、その増加する勢いは明代後期の出版ブームを生みだした。元代後期と明代初期の建陽の出版量を比較すると、出版業の衰退が明代初頭まで起こらなかったことが分かる。元代出版物二二〇點のうち、少なくとも六〇點が元代末期の出版である。さらに、建陽の出版物は一三六七年まで出版されており、建陽では元代後期に出版業の衰退は無かったといえる。明代初期に起こった出版業の衰退について、注意すべ

き點を擧げるならば、(一) 出版業の衰退は、建陽より江南の方が厳しかった。それは、江南にとって重要であった官刻の減少が、出版業の全般的不振を厳しいものにした爲である。(二) 建陽の江南圖書市場への長期的依存が、江南自身の經濟的回復無しには、その復興を不可能にしていた。(三) 建陽の出版業が華中華南の市場と密接なつながりに依存していたのであれば、建陽の繁榮は事實上、閩北の經濟よりも華中華南の市場經濟を反映するものであった。

明代前期・後期の建陽の出版物の數量的側面をそれぞれ詳細な四部分類カテゴリーで圖表化したものからは、以下の結論がえられる。(一) いずれのカテゴリーにおいても、明代前期よりも後期の方が、出版量が増加している。(二) 四書及びその注釋、儒家の著作、醫學書は明代後期、絶對數の増加がみられるが、相對的にはそれぞれ同一の比率で増加している。(三) 明代後期、建陽書肆の主要な出版物となる戯曲と白話小説は明代以前ほとんど出版されていない。(四) 相對的にも絶對的にも著しく増加した印刷物は、主として非學術的著作であり、謝肇淛のような保守的知識人が好まず、輕薄と考えるものであった。(五) 明代後期の出版業は、保守的知識人によつて批判される類の著作物の購買者たちの要求を満たしつつあった。(六) 安っぽい、安價な著作物を購入する多數の顧客無しには、明代後期の出版ブームは起こらなかったであらう。

三

本書は、建陽の出版業の歴史的展開を中國出版史の全體像と關

の處理を行うと、明代前半の出版物は、全體のわずか一〇パーセント以下となる。この數字は、初期の印刷物の「自然な」残存率低下に歸することはできない。歴史的狀況は、建陽と江南の兩方に同じように出版業の衰退をもたらしたのである。

出版物の残存率の正確化は、明代前期と後期の出版量の不均衡を是正するのだろうか。一五五三年版『建陽縣志』中の三八四タイトルと一五七〇年ごろ編纂の周弘祖『古今書刻』中の建陽刊本三六八タイトルを、現存のリストと比較すると、どちらのケースにおいても約三分の一の残存率が得られる。しかしながら、この二つのリストはともに十分なものではない。前者には宋元版を含む可能性があるが、一四部の宋元版を除いても、残存率は三六パーセント程度にしか増えない。後者には一五七三年以前に出版された醫書、文集の現存リストの半分以下しか含まず、完全なリストとは言えない。また、兩者はともに、小説や演劇を含まない。この残存率の是正を受け入れ、既知の數字を三倍し、かつ明代後期の残存率を百パーセントと假定しても、明代前半に出版された圖書は三六パーセントにしか増加しない。明代後期、建陽での商業出版の著しい進展は否定できない事實である。

十六世紀初頭、商業出版の復興があり、その増加する勢いは明代後期の出版ブームを生みだした。元代後期と明代初期の建陽の出版量を比較すると、出版業の衰退が明代初頭まで起こらなかったことが分かる。元代出版物二二〇點のうち、少なくとも六〇點が元代末期の出版である。さらに、建陽の出版物は一三六七年まで出版されており、建陽では元代後期に出版業の衰退は無かったといえる。明代初期に起こった出版業の衰退について、注意すべ

き點を擧げるならば、(一) 出版業の衰退は、建陽より江南の方が厳しかった。それは、江南にとって重要であった官刻の減少が、出版業の全般的不振を厳しいものにした爲である。(二) 建陽の江南圖書市場への長期的依存が、江南自身の經濟的回復無しには、その復興を不可能にしていた。(三) 建陽の出版業が華中華南の市場と密接なつながりに依存していたのであれば、建陽の繁榮は事實上、閩北の經濟よりも華中華南の市場經濟を反映するものであった。

明代前期・後期の建陽の出版物の數量的側面をそれぞれ詳細な四部分類カテゴリーで圖表化したものからは、以下の結論がえられる。(一) いずれのカテゴリーにおいても、明代前期よりも後期の方が、出版量が増加している。(二) 四書及びその注釋、儒家の著作、醫學書は明代後期、絶對數の増加がみられるが、相對的にはそれぞれ同一の比率で増加している。(三) 明代後期、建陽書肆の主要な出版物となる戯曲と白話小説は明代以前ほとんど出版されていない。(四) 相對的にも絶對的にも著しく増加した印刷物は、主として非學術的著作であり、謝肇淛のような保守的知識人が好まず、輕薄と考えるものであった。(五) 明代後期の出版業は、保守的知識人によつて批判される類の著作物の購買者たちの要求を満たしつつあった。(六) 安っぽい、安價な著作物を購入する多數の顧客無しには、明代後期の出版ブームは起こらなかったであらう。

三

本書は、建陽の出版業の歴史的展開を中國出版史の全體像と關

連させて以下のように論じる。

建陽の出版業の六〇〇年間は、唐代における木版印刷の開始と、清朝末期のその終焉を共にしていない。しかし、中國における木版印刷の最も盛んな時代を共有している。したがって、建陽の出版業に對する研究は、中國の圖書についてその社會史の抽出の可能性を検證することになる。研究の主眼は以下の四點である。(一) 木版印刷は中國の諸階層にどのようなインパクトを與えたか。(二) 商業出版は、社會的ニーズにどのように應えたか。(三) 商業出版物の外観と内容はどのように變化したか。(四) 木版印刷文化と西洋の活字印刷文化はどのような違いを有するか。一般

的印象としては、現存の資料からは、上記の諸論點に關して十分な情報が得られないと思われるが、著者は、この調査研究の結果、それは悲觀的にすぎると結論する。

八世紀から二十世紀まで木版印刷の技術的進歩はほとんど無かつた。また、ページ・レイアウトに變化はなく、上質な紙、よい字體など、つねに手書き寫本に近似することが評價の基準として存在した。

新技術の出現は、すぐには社會的利用に繋がらない。印刷術は唐代初期に出現したが、初期には宗教的目的で利用されるのみであつた。八世紀後半になり、曆、學習入門書、辭書に活用されるようになったが、政府および教養あるエリートに廣く利用されるようになるのは、宋代に入ってからである。

なぜ、建陽が出版の中心地になったのか。三つの要因を指摘することが出来る。(一) 木版印刷に使用できる豊富な自然素材の存在、(二) 福建と江南をつなぐ内陸交易ルート(水路)の要地

であつたこと、(三) 科擧への成功へと繋がる道學運動の知的傳統。この三つが重なることにより、南宋において建陽は一世紀に満たない短期間に國家的規模の出版業の中心地となつた。

では、科擧という大きな後ろ盾を失つた元代において、建陽の出版業は何故生き残つたのか。著者は、南宋以來の知的傳統の持續と共に、處方藥の集成といった醫學著作や家庭百科事典、繪入り歴史小説のような非學術的著作の出版こそが、建陽の元代における發展を説明すると主張する。多様な讀者を有する巨大市場、明代に壓倒的存在になる日用書、娛樂書という非學術的著作という市場へのシフトという強い商業的性格が建陽を生き延びさせた。一般的に元版のページレイアウトは、次第に狭苦しいものになり、本文や小字の注釋はページ内にいつそう詰め込まれるようになった。多くの著作が、粗惡であっても安價にリプリントされ、容易に利用できるようになった。出版物の一般的價値の低下は、逆に巨大市場へと出版業を導いたかもしれない。これまで本を買わなかつた階層が、讀むためよりも見せびらかすために、名聲ある著作の廉價版を買うかもしれない。

問題點は、元代の非學術的著作の殘存率の低さである。實物が残っていないということはどう考えるのか。著者は、失われたものと残つたものと間の大きな較差は、文化を掌握した支配的エリートと非エリートの差であるという。國家とエリート達の價値を宣言する書物のみが、大事にされ、これまで殘存してきたと言ふのである。そして、失われたもの、一時使用の商業印刷物は、より大きな印刷された圖書の一部となり、日用類書として固定化したという。大量の安價な印刷物は、少數の高價な書物よりも長

連させて以下のように論じる。

建陽の出版業の六〇〇年間は、唐代における木版印刷の開始と、清朝末期のその終焉を共にしていない。しかし、中國における木版印刷の最も盛んな時代を共有している。したがって、建陽の出版業に對する研究は、中國の圖書についてその社會史の抽出の可能性を検證することになる。研究の主眼は以下の四點である。(一) 木版印刷は中國の諸階層にどのようなインパクトを與えたか。(二) 商業出版は、社會的ニーズにどのように應えたか。(三) 商業出版物の外観と内容はどのように變化したか。(四) 木版印刷文化と西洋の活字印刷文化はどのような違いを有するか。一般

的印象としては、現存の資料からは、上記の諸論點に關して十分な情報が得られないと思われるが、著者は、この調査研究の結果、それは悲觀的にすぎると結論する。

八世紀から二十世紀まで木版印刷の技術的進歩はほとんど無かつた。また、ページ・レイアウトに變化はなく、上質な紙、よい字體など、つねに手書き寫本に近似することが評價の基準として存在した。

新技術の出現は、すぐには社會的利用に繋がらない。印刷術は唐代初期に出現したが、初期には宗教的目的で利用されるのみであつた。八世紀後半になり、曆、學習入門書、辭書に活用されるようになったが、政府および教養あるエリートに廣く利用されるようになるのは、宋代に入ってからである。

なぜ、建陽が出版の中心地になったのか。三つの要因を指摘することが出来る。(一) 木版印刷に使用できる豊富な自然素材の存在、(二) 福建と江南をつなぐ内陸交易ルート(水路)の要地

であつたこと、(三) 科擧への成功へと繋がる道學運動の知的傳統。この三つが重なることにより、南宋において建陽は一世紀に満たない短期間に國家的規模の出版業の中心地となつた。

では、科擧という大きな後ろ盾を失つた元代において、建陽の出版業は何故生き残つたのか。著者は、南宋以來の知的傳統の持續と共に、處方藥の集成といった醫學著作や家庭百科事典、繪入り歴史小説のような非學術的著作の出版こそが、建陽の元代における發展を説明すると主張する。多様な讀者を有する巨大市場、明代に壓倒的存在になる日用書、娛樂書という非學術的著作という市場へのシフトという強い商業的性格が建陽を生き延びさせた。一般的に元版のページレイアウトは、次第に狭苦しいものになり、本文や小字の注釋はページ内にいつそう詰め込まれるようになった。多くの著作が、粗惡であつても安價にリプリントされ、容易に利用できるようになった。出版物の一般的價値の低下は、逆に巨大市場へと出版業を導いたかもしれない。これまで本を買わなかつた階層が、讀むためよりも見せびらかすために、名聲ある著作の廉價版を買うかもしれない。

問題點は、元代の非學術的著作の殘存率の低さである。實物が残っていないということはどう考えるのか。著者は、失われたものと残つたものと間の大きな較差は、文化を掌握した支配的エリートと非エリートの差であるという。國家とエリート達の價値を宣言する書物のみが、大事にされ、これまで殘存してきたと言ふのである。そして、失われたもの、一時使用の商業印刷物は、より大きな印刷された圖書の一部となり、日用類書として固定化したという。大量の安價な印刷物は、少數の高價な書物よりも長

期間生き残らないようである。出版業という点から見ると、高品質のオリジナルな書物は、安価な普通の粗悪な印刷物より重要ではなかった。おそらく普通の、高価でない版として、現在知られている以上に多くの著作物が存在したであろう。こうした人気がある著作の出版と販賣が、宋代の文化的経済的最盛期を共有しており、元代も衰えることなく續いたと信じるのが、より眞實に近いのであろう。

既存の研究では、宋元代は印刷物の社會的普及が未だ不十分な時代で、印刷物の優位が決定的になるのは明代十六世紀半ば印刷本の前例のない爆發的急増が始まった時とされる。著者は、この基本的主張の妥當性を否定するものではないが、幾分かバランスの是正が必要であると考えている。第一に、明代における「印刷物の優位」は、必然的に主として印刷物を知識人が使用することに基づいている。というのは、非知識人グループにとつての讀書の対象である、人気がある若しくは實用的な著作を含む印刷物で、知識人が讀んでもわざわざ書き留めることをしなかったものについての情報を我々は缺くからである。第二に、明代後期と宋元代を比較する場合、既知の全ての出版物を考慮にいれても、なお上記の問題を考察するための資料は、宋元代については絶望的に數が限られていることである。

明代初期の出版の全國的衰退期において、建陽はどうであったのか。明代前半の建陽の出版物は、明代一代、建陽で出版された量の一〇パーセントにしか過ぎず。建陽は明代出版業の一般的傾向を反映している。したがって、建陽の出版業における明代の既知の出版物一六〇〇件餘りから、華中、華南の社會的文化的情報

を統計的に推定することは可能と考えられる。

宋元、明初と明代後半との間には、商業出版物における重要な質的變化が存在する。それは、この時代におけるリテラシーの成長を反映するものであり、印刷された書物における情報の利用についての、知識人以外の集團の増大する認識の反映であり、明代後期の個人的經濟分野の一般的成長と關連するものである。第一に、建陽の出版業は非常に廣い地域に圖書を供給しており、建陽で出版された圖書は、其れが出版された山開部の僻地についてよりも全體として華中、華南についてより多くのことを告げている。第二に、建陽における元末から始まる初期の長期的衰退と十六世紀における目覺ましい文藝復興は、全體として中國出版史の動向を反映している。

印刷文化は、中國において何時「支配的」になったか。井上進「藏書と讀書」東方學報六二、一九九〇年、「書肆・書賈・文人」荒井健編『中華文人の生活』平凡社、一九九四年）およびマクデモット（Joseph McDermott）『The Ascendancy of the Imprint in China』*Printing and Book Culture in Late Imperial China*, ed. Cynthia J. Brokaw and Kai-wing Chow. Berkeley: University of California Press, 2005）の主張は以下の通りである。公的および商業出版は、ともに十二世紀初めまでに急速に成長した。しかし、印刷の使用は十六世紀中葉から後半の明代になって始めて知識人と非知識人の間に廣まった。この主張は次の三點に基づいている。（一）寫本が刊本に取って代わられるまでの時代における、寫本の持續的で壓倒的な支配。（二）圖書製造のコストと書物の價値の低下についての證據。（三）明代後期までの書物の

期間生き残らないようである。出版業という点から見ると、高品質のオリジナルな書物は、安価な普通の粗悪な印刷物より重要ではなかった。おそらく普通の、高価でない版として、現在知られている以上に多くの著作物が存在したであろう。こうした人気がある著作の出版と販賣が、宋代の文化的経済的最盛期を共有しており、元代も衰えることなく續いたと信じるのが、より眞實に近いのであろう。

既存の研究では、宋元代は印刷物の社會的普及が未だ不十分な時代で、印刷物の優位が決定的になるのは明代十六世紀半ば印刷本の前例のない爆發的急増が始まった時とされる。著者は、この基本的主張の妥當性を否定するものではないが、幾分かバランスの是正が必要であると考えている。第一に、明代における「印刷物の優位」は、必然的に主として印刷物を知識人が使用することに基づいている。というのは、非知識人グループにとつての讀書の対象である、人気がある若しくは實用的な著作を含む印刷物で、知識人が讀んでもわざわざ書き留めることをしなかったものについての情報を我々は缺くからである。第二に、明代後期と宋元代を比較する場合、既知の全ての出版物を考慮にいれても、なお上記の問題を考察するための資料は、宋元代については絶望的に數が限られていることである。

明代初期の出版の全國的衰退期において、建陽はどうであったのか。明代前半の建陽の出版物は、明代一代、建陽で出版された量の一〇パーセントにしか過ぎず。建陽は明代出版業の一般的傾向を反映している。したがって、建陽の出版業における明代の既知の出版物一六〇〇件餘りから、華中、華南の社會的文化的情報

を統計的に推定することは可能と考えられる。

宋元、明初と明代後半との間には、商業出版物における重要な質的變化が存在する。それは、この時代におけるリテラシーの成長を反映するものであり、印刷された書物における情報の利用についての、知識人以外の集團の増大する認識の反映であり、明代後期の個人的經濟分野の一般的成長と關連するものである。第一に、建陽の出版業は非常に廣い地域に圖書を供給しており、建陽で出版された圖書は、其れが出版された山開部の僻地についてよりも全體として華中、華南についてより多くのことを告げている。第二に、建陽における元末から始まる初期の長期的衰退と十六世紀における目覺ましい文藝復興は、全體として中國出版史の動向を反映している。

印刷文化は、中國において何時「支配的」になったか。井上進「藏書と讀書」東方學報六二、一九九〇年、「書肆・書賈・文人」荒井健編『中華文人の生活』平凡社、一九九四年）およびマクデモット（Joseph McDermott）『The Ascendancy of the Imprint in China』*Printing and Book Culture in Late Imperial China*, ed. Cynthia J. Brokaw and Kai-wing Chow. Berkeley: University of California Press, 2005）の主張は以下の通りである。公的および商業出版は、ともに十二世紀初めまでに急速に成長した。しかし、印刷の使用は十六世紀中葉から後半の明代になって始めて知識人と非知識人の間に廣まった。この主張は次の三點に基づいている。（一）寫本が刊本に取って代わられるまでの時代における、寫本の持續的で壓倒的な支配。（二）圖書製造のコストと書物の價値の低下についての證據。（三）明代後期までの書物の

缺乏についての様々な著述家達の觀察。この主張を認めるにせよ反證するにせよ、我々は十分な情報を欠いている。本書の議論により、單純に是非を決定できないことは明白である。時代の経過による殘存率の變化を考慮しても、明代以前よりも以降の建陽の現存する出版物の量は多い。しかし、宋元の出版物の多様性が、明代後期よりも著しく少ないとは言えないこと、印刷術の衝撃が、單純な形ではその出版數に對應しないこと、藏書リストが所藏者の現實の讀書習慣を反映しないかも知れないこと等を考慮すると、出版物の優勢が何時始まるかを確定することは困難である。

明代の出版業は前例のない多様な圖書を出版したが、明代の建陽は何を生み出さなかつたのか。まず、高度な技術力を必要とする多色刷り印刷本、金屬活字本は、一六〇〇點を越える建陽刊本中に存在しない。また、地理書は殆どなく、技術的著作もほとんど無い。その出版物のレパートリーは出版産業の商業的本質によつて決定されており、主として出版されたのは、舊來の醫學書、日用類書、娛樂書、科擧の參考書やマニュアル、學術著作の解説やダイジェスト版である。建陽の出版業は、完全に市場に制御されていたのである。したがつて、コストのかかる大部の著作、市場の狭い學術的著作は當然ながら敬遠された。とするならば、重要な學術的著作の入手困難さに對する明代の著述家の嘆きも、商業出版の優位性に關係するものであつたのかもしれない。總じて、建陽の出版業は保守的で、明代出版業の新生面を代表してはいない。

十七世紀中葉、建陽出版業の衰退の原因を著者はどのように説明するのか。著者は既存の説明二つ、(一)明清交替期の混亂と

破壊。(二)非都市出版センターが、大都市出版センターとの競争に敗れた、をともに十分ではないと退ける。著者は、最も重要な點として、(三)全體的な經濟的不況をあげる。すなわち、明初からこの地域に廣まっていた不況が、閩北を貫く地域間交易の衰退によつてより惡化し、建陽は、大都市の出版センター(江南、福建沿岸部)よりも優位性をもっていた利點を消失し衰退していったとするのである。

建陽の出版業のユニークな點は、(一)安價で二流の出版物が、田舎の出版センターに期待されたこと、(二)高級から低俗まであらゆる種類のものが出版されたこと、(三)龐大な出版量、(四)大都市の出版センターと數世紀に渡つて競争しえたこと、の四點である。では、大都市に位置する出版業に較べて不利な條件を有するように見える建陽は出版センターとしてなぜ成功したか。(一)高い輸送コストは、安價で豊富な自然資源(紙、墨、木材、人件費)によつて克服、(二)圖書についての地域市場の缺如は、重要な交易ルートの結節點に位置したことで克服、(三)初期の勃興を支えた知的傳統の元明代における衰退は、非學術的著作へのシフトで克服したことが擧げられる。特に第二點については、十五世紀後半におけるヨーロッパの主要な出版センターであつたりヨンが、卓越した知的傳統を持たなかつたが、大陸の主要交易ルートの結節點であつた點を比較の對象として擧げる。

四

ヨーロッパの出版史と比較したとき、中國の出版史はどのような差異があるのか。出版という新しい技術の衝撃は、ヨーロッパ

缺乏についての様々な著述家達の觀察。この主張を認めるにせよ反證するにせよ、我々は十分な情報を欠いている。本書の議論により、單純に是非を決定できないことは明白である。時代の経過による殘存率の變化を考慮しても、明代以前よりも以降の建陽の現存する出版物の量は多い。しかし、宋元の出版物の多様性が、明代後期よりも著しく少ないとは言えないこと、印刷術の衝撃が、單純な形ではその出版數に對應しないこと、藏書リストが所藏者の現實の讀書習慣を反映しないかも知れないこと等を考慮すると、出版物の優勢が何時始まるかを確定することは困難である。

明代の出版業は前例のない多様な圖書を出版したが、明代の建陽は何を生み出さなかつたのか。まず、高度な技術力を必要とする多色刷り印刷本、金屬活字本は、一六〇〇點を越える建陽刊本中に存在しない。また、地理書は殆どなく、技術的著作もほとんど無い。その出版物のレパートリーは出版産業の商業的本質によつて決定されており、主として出版されたのは、舊來の醫學書、日用類書、娛樂書、科擧の參考書やマニュアル、學術著作の解説やダイジェスト版である。建陽の出版業は、完全に市場に制御されていたのである。したがつて、コストのかかる大部の著作、市場の狭い學術的著作は當然ながら敬遠された。とするならば、重要な學術的著作の入手困難さに對する明代の著述家の嘆きも、商業出版の優位性に關係するものであつたのかもしれない。總じて、建陽の出版業は保守的で、明代出版業の新生面を代表してはいない。

十七世紀中葉、建陽出版業の衰退の原因を著者はどのように説明するのか。著者は既存の説明二つ、(一)明清交替期の混亂と

破壊。(二)非都市出版センターが、大都市出版センターとの競争に敗れた、をともに十分ではないと退ける。著者は、最も重要な點として、(三)全體的な經濟的不況をあげる。すなわち、明初からこの地域に廣まっていた不況が、閩北を貫く地域間交易の衰退によつてより惡化し、建陽は、大都市の出版センター(江南、福建沿岸部)よりも優位性をもっていた利點を消失し衰退していったとするのである。

建陽の出版業のユニークな點は、(一)安價で二流の出版物が、田舎の出版センターに期待されたこと、(二)高級から低俗まであらゆる種類のものが出版されたこと、(三)龐大な出版量、(四)大都市の出版センターと數世紀に渡つて競争しえたこと、の四點である。では、大都市に位置する出版業に較べて不利な條件を有するように見える建陽は出版センターとしてなぜ成功したか。(一)高い輸送コストは、安價で豊富な自然資源(紙、墨、木材、人件費)によつて克服、(二)圖書についての地域市場の缺如は、重要な交易ルートの結節點に位置したことで克服、(三)初期の勃興を支えた知的傳統の元明代における衰退は、非學術的著作へのシフトで克服したことが擧げられる。特に第二點については、十五世紀後半におけるヨーロッパの主要な出版センターであつたりヨンが、卓越した知的傳統を持たなかつたが、大陸の主要交易ルートの結節點であつた點を比較の對象として擧げる。

四

ヨーロッパの出版史と比較したとき、中國の出版史はどのような差異があるのか。出版という新しい技術の衝撃は、ヨーロッパ

におけるのと同じくらい、中國においても重大であつた。しかし、その物語は全く異なる。第一に、中國社會は、出版の主流として八世紀に木版印刷が選擇され、十九世紀に活字印刷、石版印刷が一般化するまでそれは續いた。その理由は、木版印刷が漢字という文字システムに適合的であつたこと、經濟性と効率という點から商業出版に適していたことが挙げられる。十一世紀の建陽出版業の勃興と急速な成長は、閩北の山間部に位置したことが、木版印刷にとつて豊富な原材料（紙、墨、木版）と安價な勞働力の供給を可能にし、そのことで大都市の出版センターとの競争を勝ち抜けたことを背景としている。

第二に、社會の異なる階層が異なる目的に沿つて印刷を利用し始める過程である。たとえば、士大夫エリートの社會的編成や思想運動に對する印刷術の深遠な影響は、その發明から二世紀も経つた北宋になつてやつと現れはじめた。それは西ヨーロッパにおける變化に較べ時間がかかつてゐる。しかし、一旦、變化が生じると、印刷術による學習、記憶、讀書、書寫の方法の變化、テキストが固定化され、容易に複寫される形態で對照傳達が可能になつたという點が、學習のあらゆる領域に影響を與えはじめた。

第三に、教養あるエリートの商業出版人への低い評價は、西ヨーロッパと對照的である。たとえば、バーゼルのヨハネス・アームルバッハ、ヴェネチアのアルド・マヌツィオ（アルドゥス・マヌティウス）、パリのジョス・バード（一五〇三—一三五）のようなユマニスト出版人は、學者と認められ、當時の優れた思想家の友人であつた。一方、中國における商業出版人は、利益の爲に出版に従事しているという理由から名譽ある活動とは見なさ

れなかつた。

第四に、傳統中國における商業出版への低い評價は、西ヨーロッパの商業出版との比較研究に利用可能な資料の缺乏をも意味した。我々は出版人自身についての情報を欠いている。アルド・マヌツィオの同時代、十五世紀後半から十六世紀初頭における代表的な建陽の出版人劉洪毅について、家譜中のほんの二、三の情報しか手に入らない。アントウエルペンのクリストフ・プランタンと同時代の、十六世紀後半から十七世紀初めの最も著名な建陽の出版人余象斗についても傳記的情報はほとんど得られない。さらに、印刷、出版、圖書販賣についてもその詳細な内容を我々は何も知ることができない。

第五に、書物の外觀と形式の變化についても、中國と西ヨーロッパは大いに異なる。ヨーロッパの初期の出版は寫本の形式に極めて忠實であつたが、やがて活字を活用することで、寫本とは全く異なる外見の出版物が成立した。ところが、中國の木版印刷においては、基本的に原型に忠實な複寫彫刻という技術によつて、寫本の形式が印刷本の形式を拘束し續けた。印刷本においても、その理想は、寫本と同じく上質の紙と美しい字體であつた。唯一異なる點は、印刷本における匠體（職人スタイル）という文字の形態で、明代後期に一般化し、彫刻の容易さと字體の読みやすさを向上させた。

第六に、圖解の方法が挙げられる。ヨーロッパでは十六世紀後半までに、木版の圖解は、ほとんどの部分で、銅板彫刻とエッチングに取つて代わられ、優れた細部表現と陰影の表現能力を有するようになった。一方、中國では、木彫の技術的限界に從屬し、

におけるのと同じくらい、中國においても重大であつた。しかし、その物語は全く異なる。第一に、中國社會は、出版の主流として八世紀に木版印刷が選擇され、十九世紀に活字印刷、石版印刷が一般化するまでそれは續いた。その理由は、木版印刷が漢字という文字システムに適合的であつたこと、經濟性と効率という點から商業出版に適していたことが挙げられる。十一世紀の建陽出版業の勃興と急速な成長は、閩北の山間部に位置したことが、木版印刷にとつて豊富な原材料（紙、墨、木版）と安價な勞働力の供給を可能にし、そのことで大都市の出版センターとの競争を勝ち抜けたことを背景としている。

第二に、社會の異なる階層が異なる目的に沿つて印刷を利用し始める過程である。たとえば、士大夫エリートの社會的編成や思想運動に對する印刷術の深遠な影響は、その發明から二世紀も経つた北宋になつてやつと現れはじめた。それは西ヨーロッパにおける變化に較べ時間がかかつてゐる。しかし、一旦、變化が生じると、印刷術による學習、記憶、讀書、書寫の方法の變化、テキストが固定化され、容易に複寫される形態で對照傳達が可能になったという點が、學習のあらゆる領域に影響を與えはじめた。

第三に、教養あるエリートの商業出版人への低い評價は、西ヨーロッパと對照的である。たとえば、バーゼルのヨハネス・アームルバッハ、ヴェネチアのアルド・マヌツィオ（アルドゥス・マヌティウス）、パリのジョス・バード（一五〇三—一三五）のようなユマニスト出版人は、學者と認められ、當時の優れた思想家の友人であつた。一方、中國における商業出版人は、利益の爲に出版に従事しているという理由から名譽ある活動とは見なさ

れなかつた。

第四に、傳統中國における商業出版への低い評價は、西ヨーロッパの商業出版との比較研究に利用可能な資料の缺乏をも意味した。我々は出版人自身についての情報を欠いている。アルド・マヌツィオの同時代、十五世紀後半から十六世紀初頭における代表的な建陽の出版人劉洪毅について、家譜中のほんの二、三の情報しか手に入らない。アントウエルペンのクリストフ・プランタンと同時代の、十六世紀後半から十七世紀初めの最も著名な建陽の出版人余象斗についても傳記的情報はほとんど得られない。さらに、印刷、出版、圖書販賣についてもその詳細な内容を我々は何も知ることができない。

第五に、書物の外觀と形式の變化についても、中國と西ヨーロッパは大いに異なる。ヨーロッパの初期の出版は寫本の形式に極めて忠實であつたが、やがて活字を活用することで、寫本とは全く異なる外見の出版物が成立した。ところが、中國の木版印刷においては、基本的に原型に忠實な複寫彫刻という技術によつて、寫本の形式が印刷本の形式を拘束し續けた。印刷本においても、その理想は、寫本と同じく上質の紙と美しい字體であつた。唯一異なる點は、印刷本における匠體（職人スタイル）という文字の形態で、明代後期に一般化し、彫刻の容易さと字體の読みやすさを向上させた。

第六に、圖解の方法が挙げられる。ヨーロッパでは十六世紀後半までに、木版の圖解は、ほとんどの部分で、銅板彫刻とエッチングに取つて代わられ、優れた細部表現と陰影の表現能力を有するようになった。一方、中國では、木彫の技術的限界に從屬し、

そのかなり単純な線描は容易にコピーされるものであった。したがって、標準的能力の刻工によって、容易に、能率良く、安價に、獨創性無く、技術的向上無く、長期的永續的に生産され續けた。

文献のみに頼って過去を再構成する場合、しばしば文献を生みだした社會階層の視點、世界像を無批判に受け入れることになりがちである。自らそれを選択し、中國正統文化の後繼者を以て自認するかにみえる場合もあるが、そこから排除される存在はあまりにも大きい。著者は、徹底した現存物についての調査と統計的

處理、ヨーロッパ社會との比較の視點から、排除されたものに目を向ける。問題の大きさに比し、資料の少なさが目立ち、長い検討の果てに結論を留保している場合も多い。總じて、著者の論調は極めて慎重であり、紹介にあたつて、見解を單純化し纏めすぎた點もあるかもしれない。ご寛恕を請う。

Cambridge, Mass.: Harvard University Press,

2002, xxi + 442pp.

そのかなり単純な線描は容易にコピーされるものであった。したがって、標準的能力の刻工によって、容易に、能率良く、安價に、獨創性無く、技術的向上無く、長期的永續的に生産され続けた。

文献のみに頼って過去を再構成する場合、しばしば文献を生みだした社會階層の視點、世界像を無批判に受け入れることになりがちである。自らそれを選択し、中國正統文化の後繼者を以て自認するかにみえる場合もあるが、そこから排除される存在はあまりにも大きい。著者は、徹底した現存物についての調査と統計的

處理、ヨーロッパ社會との比較の視點から、排除されたものに目を向ける。問題の大きさに比し、資料の少なさが目立ち、長い検討の果てに結論を留保している場合も多い。總じて、著者の論調は極めて慎重であり、紹介にあたつて、見解を單純化し纏めすぎた點もあるかもしれない。ご寛恕を請う。

Cambridge, Mass.: Harvard University Press,

2002, xxi + 442pp.